No. 105

1960年 12月 1日

千曲会報

昭和35年12月1日発行
長野県上田市常入
信州大学繊維学部内
編集兼発行人　小山長雄
信州大学繊維学部内
発行所　社団法人 千曲会

昭和31年6月18日第3種郵便物認可　毎月1日発行　定価1部15円　振替口座 長野 6243 東京 43341

主な記事

記念式典終了御挨拶……1
信大繊維学部創立50周年記念式の記……2
文部大臣祝詞……4
開校当時の思い出……8
記念式参列の雑記……11

創立50周年記念号

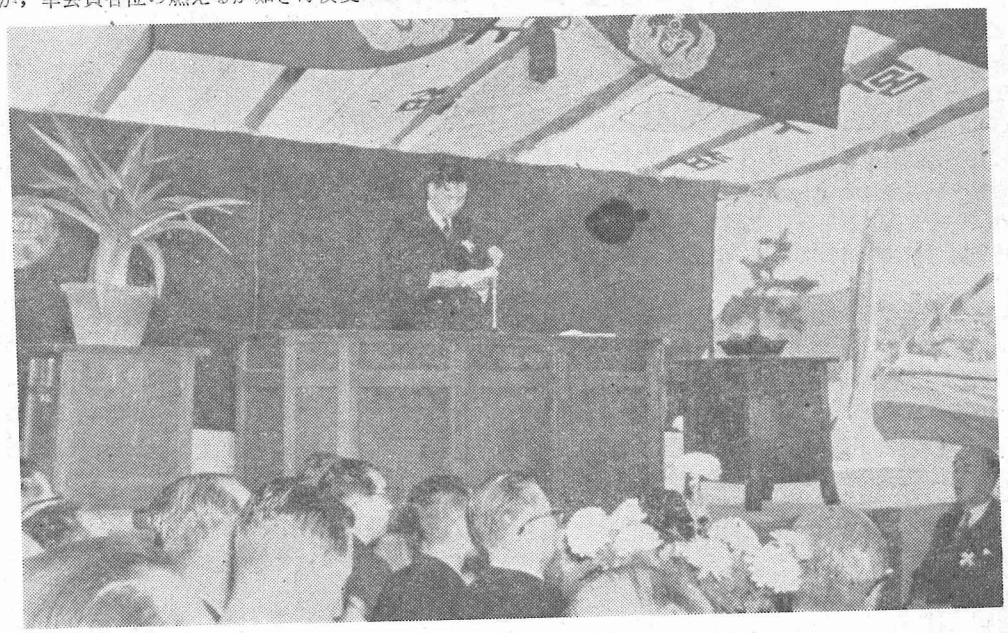
記念式典終了御挨拶

記念行事総務委員長　野口新太郎

錦秋の好季節各位愈々御清適の段お喜び申し上げます。

さてかねて一方ならぬ御協力を頂きました，母校50周年記念事業も，予定通り去る10月20日から，1週間に亘って挙行され，大成功裡に終了いたしました。まことに御同慶に存じます。

この記念事業は千曲会としては，3年前から取掛った計画でありますが，幸会員各位の燃えるが如き母校愛によって順調に進捗し，又これと呼応して設立された，地元官民を中心とする記念事業協賛会の協力によって長野県，上田市，上田商工会議所，東信地方各市町村等の公的協力を初め，母校学生，全国関係業界，地元各種業界，上田市全自治会等この種の記念行事としては殆んど類例を見ない母校の内外を網羅する絶大な御協力によりまして，当初の計画を更に充実し，諸行事は文字通り空前の盛会でありました。例えば初日の記念式参列者は，実に1,200名を越えましたので，当初予定していた講堂では間に合わず，急遽運動場に天幕張りの会場を建設するという，始末でありました。



小泉学部長式辞　（信大光画クラブ）

また千曲会員参列者も700名に及び，これまた予想をはるかに超える盛況でありまして，あれやこれやで係員は転手古舞，そのため久々の母校訪問を楽しみに，遠路折角御参列下さった会員各位，或は旧恩師職員各位に対し，つい行き届きませず失礼いたしました段誠に申訳なく，お詫申し上げる次第であります。

斯の如く今次の50周年記念行事が，予定以上の盛会且意義深く挙行出来ましたことは申すまでもなく，上記母校をとりまく内外よりの御支援のお蔭でありまして，誠に感謝感激に堪えない次第であります。謹んで厚くお礼申し上げます。

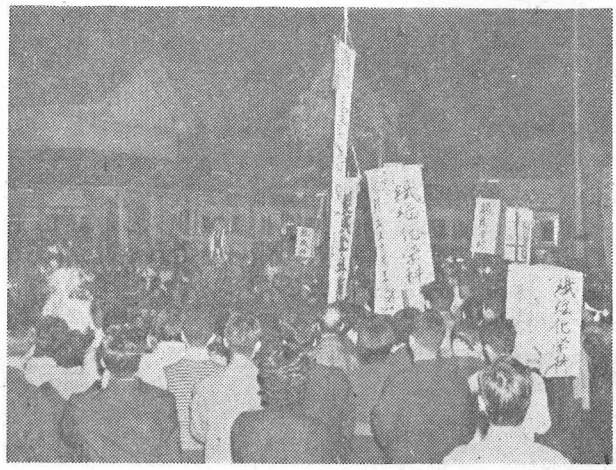
ついてはこれ等御援助下さいました各方面に対しては，当日の御出席の有無に拘わらず，其後夫々書中を以て御礼の挨拶申し上げましたが，目下事務局繁忙の折柄，不行届がありましたら何卒御容赦賜りたく，尚当日御不参の各位には，御挨拶に添えて記念品を差上げた筈でありますが，万一不着の場合は，恐縮ながら本部宛御照会願いとう存じます。

重ねて記念事業に対する絶大な御協力を深く御礼申し上げます。（35. 11. 1）

創立50周年祭の展望

伝統を誇る我が繊維学部はここに創立50周年の式典を盛大裡に挙行することが出来た。一重に同窓各位の絶大なる御協力と3ヶ年に亘る準備の賜物によるものと信ずる。開校以来わが国繊維産業界に幾多の指導的技術者である先輩各位を御送りし今日に至った学部は新時代に即応する大躍進の首途をも迎えるということになった。されば各位の植福に感謝する記念祭に併せて学生による学部祭も盛沢山に用意され開校以来の盛大なものになった。19日夕刻から始まる前夜祭からその幕は切って落された。記念事業の日程は下記のように多彩であり，加えて御集り願った各位の同級会同好会は別所に上山田に繰広げられ50年の歴史は超大圧巻として現出された

記念事業日程は19日前夜祭（15.00—20.30）に初まり，20日祝賀式（10.00）祝宴（12.00）展覧会（12.00—）市長招待会（18.00）寮祭（10.00—）21日蚕糸繊維両学会共催特別講演会（9.00—14.00）商工会議所会頭招待会（12.00）蚕糸学会研究発表会（14.30—17.00）展覧会（終日）寮祭（終日）22日蚕糸学会研究発表会(終日)学会総会(13.00）記念文化講演会（18.30—22.00）展覧会寮祭（終日）23日物故者追悼会（9.00）運動会（10.00—16.00）空手演武会（16.00）ダンスパーテー(18.30—21.00)展覧会（終日）24日学生文化局発表会（演劇，音楽，謡曲，9.00—16.00）映画（8.00—22.00）競射会（12.00）25日映画（9.00—11.00）学内祝宴（11.00—13.00）ファイヤーストーム（18.30）によって行われた。



学生行事前夜祭

50年といえば人生一代の活動期間に相当し事業一段落とも云える。ついてはこの機会に過去を省みて将来を期し，偽りなき現実の認識，広い世界的観点をもって来るべき新しい半世紀の夜明を迎えたいものである。記念祭のこの大成功は期して待つべきものあるを示し，各位と共に祝福するにやぶさかでない。重ねて御協賛各位に深甚なる感謝を捧げる。

信大繊維学部創立50周年記念式の記

20日午前11時から学部グランドに設けられた特設大会場に官界，学界，業界の多数の貴賓の御参集を願い，職員，卒業生，学生など千余の参加のもとに記念式は挙行された。記念式は国歌斉唱につづき小泉学部長から別記のような式辞があり，伊藤信大学長挨拶，文部大臣以下十数名の来賓祝詞，卒業生代表，学生代表の祝詞につづいて祝電357通の披露があった。式終了後同所に於て引続き社団法人千曲会主催の記念式があり，勤続者記念品贈呈を山口定次郎氏以下10名の方々に行い，千曲会功労者表彰を林貞三氏以下23名について行つた。準備の都合から一旦休憩の後，同所に於て千余にのぼる各位による大祝宴が挙行された。同時に市長招待会が公園内富貴で催され，好天にめぐまれた記念祭のスタートは切られたのである。大祝宴には余興として秋和女子青年団有志による上田小唄，真田音頭木曾節，花傘音頭がステージに繰りひろげられ祝賀気分はいやが上にも盛り上げられたつくるを知らぬ宴から拡声器をつかっての同志糾合なども飛出し，或いは展示会場に向う各位も見える頃宴の幕はしずかに閉じられた。

尚市長招待会には文部大臣代理以下関係学長，学部長官界長元教授その他卒業生代表各科主任等が招かれ商工会議所市役所員と共に祝杯を上げた。その夜は各所でクラス会などが計画された模様である。校門前の特設大アーチが見えなくなった頃はそれらの会合は定めし盛大であったろうと推察する。尚別記祝詞はその一部であり，紙面の都合上割愛させて戴く。

皆様の百貨店

上田・中央 ほてりや

～新車で快適な～

ハイヤー／マイクロバス の御用命は

皆様の電鉄へ

上田丸子電鉄KK

上田駅前 TEL 11・55 | 緑ヶ丘 TEL 555
上田東 TEL 404 | 別所温泉TEL(塩田)65・72

信州大学繊維学部長式辞

信州大学繊維学部長　小泉清明

本日ここに信州大学繊維学部創立50周年記念祝典を挙行するにあたりまして，文部大臣代理官殿をはじめ県内，県外から多数の来賓ならびに同窓生各位の御臨席を得ましたことは本学部のまことに光栄とするところで深く感謝の意を表する次第であります。本学部の歴史を顧みするに前身上田蚕糸専門学校は日露戦役後疲弊した国民経済を復興させるには蚕糸業の発達を期する以外に途なしという当時の政府ならびに地元有識者の要望に答え，斯業の高等なる学術と技芸を教授する目的を以て明治43年3月26日現在の学部の位置に創立されたのであります。当時の学科は養蚕製糸の二学科でありまして，初代の校長には識見手腕ともに卓越し，事実上本学の基礎を築かれた針塚長太郎先生が就任されました。学校は大正8年に絹糸紡績科を増設し，これによって蚕糸業については栽桑，育蚕，製糸，紡績，織染等生産から仕上げまでの一貫した体系をたてることができるようになりました。しかるところ，大正年間には人造絹糸昭和にはいってからは化学繊維の出現があり，学校はこの繊維業界の革命的な事態に対処するため昭和15年にはさらに繊維化学科を増設いたしました。かくて蚕糸業一辺倒であった学校の内容は新興繊維をも加えて繊維全般の研究と授業とに拡大されたのであります。これよりさき昭和12年には創立以来の功労者針塚先生は高齢の故をもって退職せられ，蚕糸化学の権威井上柳梧先生がその跡をつがれたのでありますが，繊維産業の新らしい動向への基礎づけは同先生によって一層確立したのであります。しかしその後第2次世界大戦の勃発によって学校の使命にも多少の変更を余儀なくせられ，ために校名は上田繊維専門学校と改められて，東南アジア開発の使命をも考慮し，新たに繊維農業科が設置せられ同時に養蚕製糸両科は合併して蚕糸科になりました。大戦終結の年昭和20年11月には井上先生は勇退せられて現信州大学長伊藤武男先生が第3代校長に就任せられるにより再び蚕糸科はもとの養蚕製糸の二科に分離いたしました。

昭和24年7月にはわが国の学校制度に根本的な改革が行われ，総合信州大学の発足にあたって，長い歴史と伝統を誇ったわが上田繊維専門学校も遂にそのゆいしょある校名に別れを告げて信州大学繊維学部として再出発することになりました。当時の学科は養蚕学科，製糸学科，紡織学科及び繊維化学科の4科でありまして，これに一般教養部の分室が認められて現在に及んでいるのであります。初代の学部長には伊藤武男先生が就任されましたが昭和33年8月信州大学長に栄転せらるるに及び第2代学部長には林貞三先生が選任せられ35年4年同先生が停年退職せられたあとを，不肖小泉清明がおそって現在におよび今日のよき日を迎えることが出来ましたことは身に余る光栄と存ずるところであります。

以上が50年に及ぶ信州大学繊維学部の沿革の概略でありますが特にここに明記して感激の意を表さねばならないことは，皇室の蚕糸業及び繊維産業に対する深い御関心のことでありまして，わが校は天皇陛下を初め多数の皇族方の数次にわたる御来学の光栄に浴しているのであります。すなわち昭和22年10月には天皇陛下の御来学を賜わり，親しく校内を御視察の上種々御下問をいただきました。続いて24年6月には皇太后陛下28年8月には三笠宮及び同妃殿下，翌29年には高松宮殿下の御来学御視察を賜わって本校の歴史に光輝ある一頁を加えたのであります。

以上の如く本学は人間生活に不可欠の要素〝衣〟のための繊維の教育と研究を信条として今日まで半世紀の歳月を歩んできました。その間学校の内容も外観も次々と変り漸進的にではありますが新しいものが古いものに置き変えられてまいりました。今日われわれのもっているものは創立の時にもっていたものとは根本的に変っているのであります，50年の歳月は決して短くありません。現在学内旧本館の前と生物学教室のそばにていていとそびえている2本の檪の大木は創立当時針塚先生が大星河原から実生の苗木を移し植えられたものと聞き及んでいますが，これらの大木を仰ぐ度に当時の先生のおもかげと50年の長い星霜を想起するのであります。

明治43年当時の建物の総延数1605坪は今日では6712坪となり，敷地も25755坪が70352坪に拡大されております。当時の職員数35名は現在150名に，また学生も当時の270名が500名にふえております。設備についても今日われわれのもっているものは当時の誰も想像しえなかった進歩したものであります。すべてに隔世の感があります。このような学園進歩のあとは人類の思想や科学の進歩の一つの縮図でもありましょう。本校はかくして創立以来5千名をこえる卒業生を実社会に送り，それぞれその職域にあって社会に貢献しております。

しかしわれわれをして今日あらしめている根本的のものは何か。云うまでもなく学内外の前人の植福とその上に築かれた伝統の結果であります。すなわち文部省を初めとする農林通産等の政府各省，地元の県や市町村，実業界の有力者各位のあつい御同情と心からなる後援の賜であると同時に，内にあっては歴代の学校長学部長はもとより教官ならびに事務系職員全諸君の和衷協同して職務に精励されたこと，また学生諸君よく校規を守って勉学にいそしんだ結果であることは言をまたないところであります。さらにまた5千有余の本学に学ばれた卒業生各位が在学中に築かれた真面目な愛校的伝統が直接間接に本学の振興に寄与しているところ絶大のものがあります。50年の祝賀の日を迎えてわれわれは切にこの事を想い感謝の念にたえないものがあります。

しかしわれわれもまた福を植えてこれを次の世代に送らねばなりません。科学や技術の諸関係が常に改善され進歩するものとすればわれわれの意識は伝統を尊びながらもこれを批判し受入れられているその中で，何が将来の学校の運命の開拓に対して有益であるかを察知し，それに従って移り変る時代の精神と事実に適応する学校の性格の形成に力強く踏み出していく必要がありましょう。この意味におきまして学部は今般既存学科の根本的な改組拡充と繊維機械学科の新設を計画しその実現によって新しい時代にふさわしい教育研究機関とし，ますます国家社会の付託に答える覚悟であります。ね

がわくは本学部の熱意を御理解の上今後共本学部の発展のために格別の御援助を賜わらんことを。

終りに臨み来賓各位のますます御健勝ならんことを御祈りいたします。以上過去を想起して御礼を申し述べるとともに将来への決意をひれきして式辞といたします。

昭和35年10月20日

信州大学長挨拶

本日文部大臣はじめ多勢の貴賓御臨席の下に信州大学繊維学部の創立50周年記念式典を挙げますことはわれわれの最大なる慶びであります。歴史を溯ってみますと往年蚕糸勃興の気運に剰じて上田蚕糸専門学校が我が国では最初の蚕糸に関する最高の学府として創立されたのは明治43年すなわち西暦1910年のことであります。はじめ養蚕科，製糸科の2学科を以て発足しましたが時勢の進運に伴われて年と共に多彩な発展を遂げ戦後日本の教育制度革新に際会しては昭和24年（1949）養蚕，製糸，紡織，繊維化学の4学科を擁して蚕糸のみならず全繊維を対象とする信州大学繊維学部として重きをなすに至ったものであります。

惟うに本学部は創立以来半世紀の永きにわたって繊維特に蚕糸に関して数々の輝かしい研究業績を挙げ5千有余に及ぶ卒業生を世に送って学界並びに業界のために多大の貢献を致しまして繊維の名門学府としての役割を立派に果して来た次第であります。生糸が明治以来興隆期の我国経済建設に如何に役立ったかを想うとき多少の感慨を禁じ得ないのでありますが近年繊維業界は人造繊維特に合成繊維の進出により急速に進化しつつあります。1938年のカロザースのナイロンは云うに及ばず最近年にはチーグラー，ナッタらの発見に基く全く新らしい型の繊維が期待せらるる等合成繊維の将来には端倪すべからざるものがあります。加うるに科学技術の躍進に伴い工場生産の自動化量産化等業界の趨勢は進展して止まぬ有様であります。このような情勢の最中においても生糸は構造の複雑な高分子の繊維でありますから曾つてのインジゴウと同じ運命を辿るとは考えられませんが所詮生物の生産するものであるために人力の及び得る処にも自ら限界があろうと云うもので，その天然の麗質を以てしても現状のままでいつまでも曼如たり得るものかどうか，多少の疑問なしとしないのであります。

這般の事情は大いに商量を要するところでありますが繊維学部がここに深く鑑みる所あり新時代に即応して体質の改善を熟慮するに至ったのは蓋し当然の成行であろうと考えられるのであります。今日その創立50周年記念の盛典に参列致しまして私は本学部の過去の光輝ある歴史を深い感懐をこめて称えると共に，これを転機として更生発展することを期待しその弥栄を願望するものであります。ここに一言所懐を述べて御挨拶といたしたいと存じます。

昭和35年10月20日　　信州大学長　伊　藤　武　男

文部大臣祝詞

信州大学繊維学部が創立50周年を迎え本日ここにはえある記念祝賀式の挙行されますことはまことに御同慶に堪えないところであります。当学部の前身である上田蚕糸専門学校は明治43年に発足し，のち上田繊維専門学校と改称戦後信州大学繊維学部に移行し本年はまさに50周年にあたります。当学部が発足以来一貫して繊維産業の専門教育機関として独自の学風を保持し5千名を超える卒業生を世に送り出し，わが国産業ならびに学術文化の進展に貢献された業績にははなはだ顕著なものがあります。本日この式典の行われるに当り当学部発展のあとをかえりみるとき今日まで苦心努力を重ねてこられた学長はじめ教職員各位および各関係のかたがたにはさだめし感慨の深いものがおありのことと推察致し，多年の御苦労に対し深く敬意を表する次第であります。

いまや大学における科学技術教育の振興に対して社会の期待するところはいよいよ増大しております。当学部の今後に課された使命はますます重大と申さなければなりません。この時にあたって過去の光輝ある歴史をかえりみ，また今後の発展を期するために祝賀の式典を挙行し多彩な記念の行事および事業を行なわれますことは誠に意義深い企と存じます。どうか教職員各位および学生諸君には本日を契機として決意を新たにしますます学風の発揚につとめ社会の要望にこたえられるよう希望してやまない次第であります。

昭和35年10月20日　　文部大臣　荒　木　万寿夫

（本省大学課蒲生庶務課長代読）

上田市長祝辞

秋冷の気配がみなぎり菊の香り高い本日，大勢の来賓ご列席を得てわが上田市の誇りである信州大学繊維学部の創立50周年祝典を挙行できますことは地元市長としてまた記念事業協賛会長としてまことに喜びの限りでございます。

繊維学部は日露戦役後にわが国の教育が飛躍的に伸展した時期にめぐりあわせ，明治43年に上田蚕糸専門学校の名で設立されました。当時この上田城下町は養蚕製糸の中心として繁栄を誇り蚕糸専門学校は「専門」の愛称で上田市民の生活の中にとけこみ，蚕糸業振興の軸となって偉大な貢献を果したのであります。当時からこの蚕糸専門学校に学ぶものは全国津々浦々から更に海をわたって遠く海外からの留学生も多勢ありました。蚕糸専門学校から繊維専門学校，さらに信大繊維学部と変遷がありましたが学部の同窓生5千余はいづれもわが国産業の中心となって経済活動を動かしております。国内の化学製糸関係事業のほとんどに上田蚕専，繊維学部の出身者が参画していると申しても過言ではないでしょう。

このように上田市のこの学部は日本産業の中堅人物を輩出しました。上田市もまたこの学部とともに明治大正昭和と三代にわたって発展を遂げ上田の繊維学部か，繊維学部の上田市かともいいえる今日であります。上田市が戦後の学制改革にあわせてこの学部の単科大学昇格を強く働きかけたのもこの学部の特殊性を重くみたからにほかありません。

いま創立50周年を迎えてさらに学部の充実発展に努める思いを新たにするものでありますが明年度からは繊維機械学科の増設がきまるなど原子化学時代に臨む体制は着々と進められている由であります。願わくば本日この祝典に御列席の有力者各位がさらに繊維学部の充実のために，ひいてはわが国産業振興のために一層の御援助を賜わるよう期待申し上げるものであります。さらに現在この学部に学ぶ学生諸君はわが国の産業に密着した意義ある学問と誇り高い伝統にそって真理を究める学究の徒としての本分に立って，悔いなく実力を培かうよう願ってやみません。50周年祝典の本日繊維学部のいや栄えることを全市民とともに祈念しごあいさつといたします。

昭和35年10月20日　　上田市長　堀　込　義　雄

長野県議会議長祝辞

本日信州大学繊維学部創立50周年記念の式典を挙行されるにあたりお招きを戴きかつ祝意の一端を申し述べる機会を得ましたことは私の心より喜びとするところであります。申し述べるまでもなく信州大学繊維学部は明治43年上田蚕糸専門学校として創立されたのであります。当時は養蚕，製糸の2学科を有するに過ぎなかったのでありますがその後わが国繊維産業の進展に伴い大正8年には絹糸紡績科が，又昭和15年には繊維化学科が，同19年には繊維農業科がそれぞれ増設され，校名も時代の要請を反映して上田繊維専門学校と改められたのであります。そして昭和24年の学制改革により40年に及ぶ輝かしき専門学校の歴史を閉ぢ，新たに信州大学繊維学部として発足し今日に至っておるわけであります。この間5千名になんなんとする卒業生は夫々修得した優秀なる技能と円満なる人格とをもって繊維産業界を始めとして広く貿易商社関係，官界，教育界等において日夜活躍を続けられておりますことは本学部の隆盛を物語る証左として誠に御同慶に存ずるものであります。

今や繊維産業はわが国産業中最も重要な部門に属しその生産品は単に国内需要をみたして十分なばかりでなく遠く海外市場に進出して繊維日本の名を高めております。この時にあたり関係者各位におかれては本日の式典を飛躍台として又一段と本学部の発展に御精進あらんことを切望するものであります。又在校生諸君におかれては先輩諸君の残された幾多の輝かしい伝統と歴史を受けついで霊峰浅間の如く雄大に，はたまた千曲の流れの如く清らかに社会の雑音にまよわされることなく勉学にいそしまれんことを念願するものであります以上誠に簡単でありますが一言述べまして祝辞に代える次第であります。

昭和35年10月20日　　長野県議会議長　羽　田　義　知
（森健二　代読）

繊維業界代表祝詞

菊花薫る本日茲に信州大学繊維学部の創立50周年の記念式典を挙るに当り祝詞を申し述べる機会を得ましたことは私の最も光栄とするところであります。上田蚕糸専門学校と称した開学の当時より今日まで学術の振興と共に優れたる訓育により幾多有為の人材を社会に送り，これらの方々は業界各方面第一線に活躍せられ，日本産業経済の興隆発展に寄与せられたその功績は実に大であります。

今や我国経済は飛躍的発展を見つつありますが世界の大勢である貿易為替自由化に対処し技術革新経営近代化等の新課題に直面し今後全産業人の使命は益々重きを加えつつあります。この秋に当り本学部においても新らしい時代に即応し更に学制機構の改新と施設の充実を計り着々その実現に向われつつあると聞き誠に慶賀に耐えぬところであります。一日も早くこれが実現を期し輝かしき歴史の上に更に将来繊維業界に勇飛すべき優秀なる学生を育成せられんことを希望すると共に本学部の御発展を祈りまして祝詞といたします。

昭和35年10月20日　　繊維業界代表　笠　原　正　己

卒業生総代祝詞

本日はわれ等の母校信州大学繊維学部の創立50周年の祝賀の盛典に末席を汚し本学部の前身上田蚕糸専門学校第一回卒業者として5千に余る卒業生を代表して祝辞を申述べる機会を与えられましたことは誠に私の無上の光栄とする所であります。

憶い起せば50年前上田蚕糸専門学校が当地に建設せられました当時はわが国の重要産業である蚕糸業が正に黎明期に当り私どもが第一回の学生として入学を許可されました際は非常な希望を抱いて入学致したものでありました。開校当時の校長は針塚長太郎先生であり，主なる教官は三吉先生，大森先生，阿形先生，井上先生，三谷先生，勝木先生，川瀬先生，和田先生，朝比奈先生，大滝先生，石倉先生，新楽先生，北島先生，原田先生，田中先生等で何れも20台，30台という血気溢るる新進気鋭の先生方ばかりでありまして実に張切ったスパルタ的教育を受けたことが思い出されます。当時我々は所謂針塚精神をむねとし「身を挺して進んで難局に当る」ことをモットーとし，労働の神聖と汗の体験とによって如実に教育されたものでした。

当時は養蚕科と製糸科のみでありましたから建物は少く敷地の大部分は草茫々たる原野そのままの状態であり，入学の当初は殆んど毎日開墾や草取りなどに終始し，一時は何かと不平を鳴らしたこともありました。爾来本校は歴代の校長先生の御尽力により逐年拡充に拡充を重ね，建物は開校当時の十数倍にも拡大し，繊維専門学校と改称せらるるに至って更に紡織繊維化学繊維農業の各科が新設せられ，蚕糸業は勿論一般繊維の原料生産から織物染色などの加工仕上に至る迄，実に繊維産業に対する一貫した教育と研究との殿堂と化するに至ったのであります。而も昭和24年から信州大学繊維学部として昇格するに当り教官や研究施設は益々充実し今日の壮

観を呈するに至ったので御座います。私も永い間母校教官の一人として母校に一生涯を捧げてまいったものであります丈に，母校の将来のためには絶大なる関心をよせているもので御座います。

現下のわが国の内外の情勢から観ますると一方機械工業が如何に目覚しい進展をみるに致しましても，全世界の人類の文化が益々向上するにつれて我国の平和産業の大宗たる繊維産業は量質ともに世界最高の水準にまで多々益々発展せねばならぬ責務を負わされている現状から，本学部の責任も亦益々重大なものがあると申さねばなりません。本学部における教育並に研究の内容は繊維産業の全面にわたり原料の生産から仕上加工に至る縦貫的な全施設を包含する農学より工学にわたる完全な綜合的な教育機関でありまして単なる一学部としての存在では誠に物足らぬ感が致しますことは識者の均しく認むる所であります。

願くばこの赫々たる50周年の歴史を遺憾なく生かし，一日も速く単科大学として独立発展の機運が醸成せらるるを念願して止まない次第であります。幸いに今回の50周年の記念事業として別途繊維科学振興会が発足することになっており，之によって産業界と本大学との緊密なる協力提携により本大学が繊維産業の進展に益々貢献せられることを熱望する次第であります。

本日はこの目出度い母校の記念式典に際し5千有余に及ぶ卒業生各位を代表し御祝詞を申上げると共に年来の宿望の一端を申述べさせて頂きましたことは誠に感激にたえません。謹んで御静聴を感謝申上げます。

昭和35年10月20日

上田蚕糸専門学校第一回卒業生
信州大学名誉教授 農博 蒲 生 俊 興

学生代表祝詞

あたり一面が秋の色に被われ冷かな空気が一段と快く感じられる今日ここにみすずかる信濃路に，文部大臣をはじめ業界の方々その他来賓各位御臨席のもと，信州大学繊維学部が創立以来50年を経て記念式を挙行することになりましたのは非常な喜びであります。今回の創立50周年記念式典が催されるに当つて御支援御協力を戴いた文部省をはじめ各省業界長野県当局上田市先輩諸兄に厚く感謝の意を表わすものであります。

顧みますれば本学部は上田蚕糸専門学校として明治43年に創立され50年の星霜を重ねたのでありますがその期間における我国の繊維業界の発展は学術の進歩技術の改良企業経営の刷新等において目をみはらされるものがありました。この間本学部は業界及び教育界に指導者たるべき有能な人材を多数輩出し，我国の繊維業界につくした功績は極めて大きなものであります。このように充実した本学部に学ぶことは我々繊維学部学生の大きな誇りであります。

さて目を現在に投じてみますと我国は資本主義勢力と共産主義勢力との困難な谷間にあります。また経済状態は敗戦の混乱期から漸く立なおった程度のひ弱いものであります。わが国の繊維業はかつては世界に隆盛を極めたのでありますが現状は全く予想もつかない方面からの化学繊維に圧倒され今日まで，日本の繊維界は欧米の先進国で発明されたより安くより細くより強い合理的な繊維を，高い特許料を払って辛うじて維持されている有様であります。我々繊維界に志ざす者にとっては全く屈辱的な現状と云わざるを得ない状態だと思います。

以上のように現在の日本は政治面に於ても経済面に於ても学術面に於ても殆んど世界の指導権を握つているものはないのであります。かつて25年程前まではたとえ方向を誤ったにしても兎も角一応世界の檜舞台で活躍していた日本がその後に至って全く無気力になったと云う事は悲しむべきことであります。この憂うべき現在を打開して繊維界に於ても一時代前のあの隆盛を誇った日本にもどすのが我々繊維学部に学ぶ若人たちに課せられた任務であります。それには我々学生は現在に甘んずると云った全く無気力な状態ではいけないのであります。そして我々学生は学問及び技術の革新に，生産組織機構の改革に，化学繊維の進歩発展および蚕糸業の難局打開に，若き力と情熱を傾け，もって日本の繊維界を世界の覇者たらしめるべく身命を賭して努力する覚悟であります。今後共関係各位の絶大なる御支援と御協力をお願いいたします。以上創立50周年を迎えて我々学生の新たなる決意をいささか述べまして祝辞に代えさせて頂きます。

昭和35年10月20日　信州大学繊維学部学生代表
荒 井 肇

学会と講演会

記念事業の主なるものの一つとして蚕糸，繊維両学会が21日22日両日開催された。初日は特別講演会に初まり，正午は切角おいで願った貴賓に対し商工会議所会頭招待会がほていやホールで催されバスが用意されるという時間節約手配まで準備された。午後は蚕糸学会発表会があり熱心な聴衆で2会場は一杯となった。夕暮ともなれば両学会関係者の合同懇親会が香青軒の大広間に所せましとばかりくりひろげられ盛会裸に車で別所の湯煙に送った次第である。翌日は早朝から蚕糸学会の中部支部総会研究発表会が引続き行われた。夕刻からは更に一中の講堂で記念文化講演会が開かれ一般市民で盛会であった。以上の講演の大要はいづれ本報にのせる予定であるが，その講師と演題とを紹介すれば次の如くである。

特別講演

東大教授　有賀久雄　蚕作安定からみた蚕病予防の基礎研究

九大教授
大阪市大教授　井本　稔　高分子の合成

東レ会長　田代茂樹　合成繊維界の現状と将来

記念講演

今　東光　人生雑感

小林秀雄　文芸随想

尚今　東光氏は中外日報社社長であり天台院住職でもあり小説家で作品は神経の鋭敏さとみずみずしいリズムで貫かれ新感覚派を代表している。小林秀雄氏は文芸評論家でプロレタリア文学を正面の敵としていたが，後に自意識文学と社会意識文学との統合をめがけ，創造的批評を実践して日本文学

に近代的批評を植えつけた画期的な評論家である。市内に流れる広報スピーカーと共に市民各位の参集引きも切らず有意義な一夜を提供したと信ずる。研究発表は題目数蚕関係32糸関係9桑関係16総合9，合計66の多きに亘りその講演集も残り少きまでに購読された。ちなみに講演集は一部100円であった。

記念運動会

23日午前10時から好天にめぐまれて若人の意気と力との運動会が開始された。20種目に亘る競技にはさんで幼稚園児の遊戯，市内東部地区民謡会の上田音頭までとびだし盛会であった。他の催物と重なっているので学内の賑いは勿論校庭一杯に観衆がつめかけマラソン選手の入場帰還路をまちがえる一幕もあった。夕刻無事終了することが出来，当夜のダンスパーティーの準備係の活躍をみまもりつつ散会した。

当夜のパーティーは講堂に於て21時までの予定で開かれ昼とは亦異った雰囲気がかもし出され学生諸君に貴重な思い出の一つが加わったのである。

物故者追悼会

23日午前9時から多数の物故者遺族の方々職員学生が参集し旧本館2階4号大教室に於ておごそかな追悼会が取行わされた。半田孝海師以下4名の導師の読経に始まり在天の霊に夫々の御焼香追悼が荘重に行われた。この五十周年祭に共々に参加して戴き冥福を祈る会場には寂として幽明のつながりが満ちあふれた。続いて遺族の謝辞と学部長の挨拶があり学部発展のいしづえとなられた方々に新たな決意を披瀝したのであった。

導師追悼辞

謹みて大恩教主釈迦牟尼如来，極楽浄土弥陀善逝，観音勢至等の諸大菩薩日本国中天神地祇尽空法界一切の三宝に白す。抑々信州大学繊維学部は最初上田蚕糸専門学校として開校以来正に50年の星霜を経委に其の記念大祝典を挙行するに際し関係者相謀り同学部物故者の偉大なる功績を賛えると共に旧講堂に祭壇を設け香花灯塗の妙供を備え以て報恩謝徳の大法会を催さる。惟うに物故者の中には本学部に留まり専ら内外の整備拡充を計画して本邦の繊維業界に於ける指導的技術者の養成に力められ，或は卒業の後全国の産業その他の方面へ進出して活躍せられたる人材甚だ多く今尚赫々人の耳目に在り，或は有為の才を抱きながら青春学半ばにして戦歿せられたる学徒も少なからず，吾等豈誰か追敬追悼の情なからんや。本校に縁浅からぬ予は本日の導師に迎えられ，故針塚長太郎初代校長外各々精霊菩提の挙儀に列なり感慨愈々切に追懐益々深し。幸なる哉天静まり日光又輝く。皆是れ故人の徳と云うべし。仰ぎ願わくは諸々の尊霊惚然と来って法楽供養を饗け玉わんことを乃至法界平等普潤。

昭和35年10月23日　大僧正　半田　孝海　敬白

空手部弓道部の競演

心身の鍛練を目的とし努力している空手部は学部発展と共にその基礎をかため，成果公開にまでなり23日演武会が行われた。型や演武のたびに鳴り止むことを知らぬ拍手が起り盛会であった。明日へのエネルギーを期待して止まない。

弓道部は上田市及び専売公社の弓道会を招待して競射を24日午後1時から展開した。学内外の同好の士多数参集し真しな半日が画き出され多くの感銘が人々に深く深く与えられたことと信ずる。

音楽部映画部の集い

学友会としてレコードコンサート及びコーラスの集い，映画鑑賞会が24日に行われた。コンサートは3大B特集としベートーベン，バッハ，ブラームスの名曲とギター小品集を3時間にわたり講堂一杯に流し，つづいて7曲のコーラスを演じた。コーラスは日本，ロシア，ドイツ，スペインの民謡などで同好者にうれしい感覚を余すところなく与えた。その夜は映画会にバトンをうつし「世界は恐怖する」「にあんちゃん」を上映した。核実験による放射能の脅威の長編記録映画と周知の10才の少女日記をもとにした映画との組合せで，講堂一杯の観客に充分心をゆさぶるものを与えた。

文化局展示案内

20日～24日に亘り英語部展示と映画とがあり，N．F．G（草花と石ころ，虫ケラの会）展示とが旧本館の教室2つを用いて行われた。アメリカ文化写真の展示と研究発表とがあり映画は16ミリ文化映画でアメリカ物であった。英語部の学生諸君の努力に感心する参観者で賑わった。N．F．Gはその隣りの教室にあり大室山を中心とする烏帽子岳，常念岳からの採集，実験的活動がくりひろげられてあった。また公開解剖も行い参会者に与えた感銘亦深いものがあった。

美術部は同一期間製図教室階上一杯にカンバスの美をくりひろげた。油絵，水彩を主力とし，他学部からの出品も加え作品の喜びを多数の参観者とともにあじわった。

文化局発表案内

24日午後学生と職員と合同で能と狂言とが発表された。演能は私等にしたしみやすい紅葉狩で好評さくさくであった。また仕舞，狂言がありたのしい一時を多数の人々に提供した。小歌，茶壺その他を演じ，その前後に行われた演劇部の活やくと共にたのしい一日を講堂にかもし出した。演劇は2回に亘って行われ，息子という作品を演じた。ちなみにその梗概を説明しておこう。江戸時代末期のこと，9年前に別れた息子がひよっこり父親の火の番老人の前に，金次郎という無頼漢として現われた所から劇は進行する。父親は金次郎が息子であると知らない。息子は音信不通ということになっている。しかし金次郎は上方へ出た息子について色々と老人の考えを聞こうとする。火の番小屋はうす暗く金次郎が自分の息子であると老人にわからない。息子は律気者だといいまたそれを信じたいのが老人の心である。でも会話の進行を見ていると分るように老人この無頼漢金次郎が実は自分の息子であると分ってくる。

ステレオコンサート

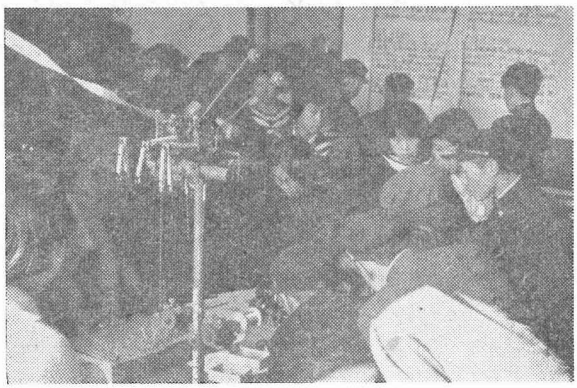
音楽部員による20日午後から夜にかけてのコンサートは講堂に於て行われ，好楽者多数に深い感銘を与え，しばし立去り難しの盛況であった。ちななみにプログラムは下記の如くである。昼の部はポピュラーミュージック集，ベートーベンピアノ協奏曲第5番皇帝であり，夜の部は前者の一部とスメタナ作曲交響詩モルダウとベートーベン交響曲第9番で，いつまでもいつまでもそのひびきは千曲河辺に流れていった。

寮祭の記

なじみ深い修己寮を開放し，団結と友情の結晶を面白おかしく披露してあった。開放は20～22日に亘り寮生活の数多くの一駒一駒が各室に充ちあふれ，めったに見ることの出来ない作品展の乱飛であった。学寮生活をした先輩各位は髣髴として20年30年の昔しを今日ここに呼びもどしたことでしよう。平屋建新館の西端室には気機車沼さんと安保犠牲嬢との位牌が仲良くならんでいたのも時節柄印象的であり，本物そっくりのバーも特設してあり，好奇な女学生の笑いは絶えず太郎山にこだましていた。

展覧会案内記

10月20日（木）祝賀式と祝宴とが午前中に終了したあと，午後は御招待者のみに展覧会を御覧願い，翌21日から一般に解放した。多数参観者に多くの感銘を与えつつ23日夕刻無事締切ることが出来た。内容は総合展示会場，養蚕学科展示室製糸学科展示室，紡織学科展示室，繊維化学科展示室に分かれ，旧本館各教室及び化学科実験室を全部使用するの盛況であつた。尚別に紡織工場の開放が行われた。今回は趣きをかえて各講座別に展示を行い，日頃学んでいる事柄や関係研究成果を中心としていた。養蚕関係では貴重なる研究成果が現物であます所なく展示され，くるみ研究や緬羊アンゴラ兎研究まであり繊維農学への態勢かくの如しと云えそうだ。製糸関係では繭糸本質の解明と自動繰糸機の改良の歴史とが写真や現物で対比され，或いは将来採用されるかも知れない理論



の模型化や関連新資材の展示に加え万能投影器の実演などがあった。紡織関係では巧妙な多数の測定実演と多数の製品とがあり，特に巨大な自動靴下編機の生産運転まであり，機構の複雑完全さに歩を止めざるものなしといった所である。繊維化学関係では近頃の合繊化繊の製法から洗剤，染色まで多岐に亘る実演と実験を展示し，分析法や樹脂利用の説明まで行い，身近かな問題が山積しているので婦人の足の重いのも無理はなかった。綜合展示室は日本の代表的繊維製品を網羅し新製品のパレードをなし行きつもどりつする人々で賑わつた正面玄関口には学生による喫茶室も設けられてあり毎日数千の参観者に憩いを提供することも忘れていなかった。時には大型バス7台にも及ぶ大団体の中学生があり，夕刻の門限をいかに実施すべきかに迷った程であった。機織工場内での実演のひびきは終日学内に流れ，テープにさそわれて参観驚異の目をむくものもあり，説明役の学生の声の枯れるのも当然であった。全部を見て廻るのに半日はどうしてもかかるといっていた人がある。

開校当時の思い出

第一期卒業生　蒲　生　俊　興

我等の母校上田蚕糸専門学校が蚕糸業に関する初めての文部直轄専門学校として上田町常入に開設されたのは明治43年（1910）の8月頃であり，その後第一回の入学生募集を官報に公示されたのが，その年の11，2月頃かと覚えている。私は43年の3月野球で鳴らした茨城県の龍ケ崎中学を卒業し，第一高等学校に於て，初めて無試験入学の制度を公示されたのを好機とし，5，6月頃，柄にもなく無試験に応募して見たが，中学からの成績の推薦が遅れたという理由で惜しくも無試入学は落選となったので，7月中旬からの入学試験に応ずべく準備していた。ところが私の養家は当時，西ケ原の蚕業講習所別科を出た養父秋山勇之助が蚕種製造業を営んでいた関係で養父の母校である農商務省の東京蚕業講習所養蚕科

後の東京高蚕を受験するように強要せられ，あわてて西ケ原に出願し直し，8月上旬同校において入学試験を受けた。私は一高を志して勉強していたのだから約十倍の競争率も首席で難なく突破し仮入学許可となって，一応西ケ原に入校し十月一日体格検査が行われた処，右眼弱視という理由で仮入学の取消となった。当時私の同期生の東京高蚕の卒業者中には錚々たる連中が居られ，例えば元愛知県蚕業試験場長の富田衛氏や，蚕糸試験場技官の河野茂盛氏などが有名である。

養家の家業の関係で蚕糸業に関する専門学校以外は受験を許されなかった私は丁度第一回の入学募集があった上田蚕専に出願して見ることになり，明治44年3月頃東京市大塚の高等師範学校において受験した。この場合は体格検査が初日に行われ，比較的簡略だったので無事通過し，翌日から3，4日間英語，数学，物理，化学，動植物，歴史，地理，国語，漢文，作文等々の殆んど全学科についての試験が行われたことを覚えている。

幸いに入学が許可せられたので四月中旬，当時蒸汽機関車による碓氷トンネルをこえ，上野，上田間凡そ八時間位かかって初めて信州地へ向った。上田では松尾町の馬場孝旅館（今の三業料理店）にて，二泊し，4月17日の入学式に列席した。所が第一回生の官報広告には沢山の誤記があり，首席で入学許可された松村幸美君の氏名が無かったので，学校からの合格通知は受けても同君は半信半疑で小さくなっていたらしく，教務課で松村君をさがしたが，見付からなかったので，養蚕製糸両科を通じ，第二席だった私が，松村君に代って入学生を代表して宣誓文を読むことになった。

旧本館の今の第四教室が入学宣誓式場に充てられ，先生方は左右に分れ東側には三吉先生，三谷先生等々，西側には阿形先生，勝木先生等々が控えて居られ，三吉先生を針塚校長かと間違っていた。暫くして係員の「起立」という号令と共に燕尾服の颯爽たる針塚校長が着席せられ，やがてトントンと中央の教壇に登段せられて，朗々と式辞を述べられたことを思い出されます。かくして第一回入学式から五十年を経過し先般の母校創立50周年記念式においてもまたもや私が五千名の卒業生を代表して，視聞を捧呈する機会に接したことは何という奇縁であり又生涯における無上の光栄とする所であります。

入学の翌日から養蚕，製糸両科生約百名が旧正門南側の圃場の天地返しや桑苗の植付作業を約二週間位課せられ，専門教育とはかくやあらむかと不平満々たるものがありました。

当時の授業で最も異色のあったのは勝木教授（後の蚕糸試験場技師）の養蚕学の講義であった。先ず養蚕学を英語で講義するといわれ Chapter 1, The History of Sericulture と黒板に書かれたあとは静かに，まるで英語の書取りの様に読まれたので到底書取れなかったから，全文を黒板に書いて頂いたのをノートに写し取ることになった。それから数週間して図書室で Silk and Silkwork という英書があったので借りて見ると，勝木先生が講義したそのままの英文とわかった。また数学，物理学及気象学は築地教授（後の中央気象台技師から松本高等学校長）が担当せられ，物理学は Watson の Higher Physics の原書を持参して，これをその場で日本語に飜訳し講義して居られた。従て私は早速その原書を丸善から取寄せて参考としたので物理学には割合に興味を覚えることができた。そして夏期休暇中の宿題は，水空気及土壌三者の熱伝導率が与えられて，その三層毎に，地表面における温度の一日中の較差がゼロになる所謂恒温帯に達する深さを計算せよというのであった。尚気象学については，先生がかわった雲を発見した時には蚕児飼育中の生徒を呼び集めて，巻層雲や巻雲などの説明をしてくれた程，熱のこもった教授振であった。尚三谷先生の製糸学水井寿一郎先生（後の長野蚕業試験場長）の夏秋蚕論，田中長三郎先生（後の台北大学教授）の遺伝学，新帰朝者大森順造先生の微生物及蚕体病理学，川瀬愈次郎先生（後の東大農学部教授）の無機，有機化学，麻生慶次郎先生（東大教授）の肥料学，原田親雄先生の独乙語和田仙太郎先生の英語，北島鉞雄先生（後の鹿児島高農教授）の栽桑学，早川直瀬先生の農蚕業経済学，阿形輝司先生の法制及経済学，新楽金備先生の実践倫理と論語講義，尚後に独乙留学新帰朝の井上柳梧先生の生理化学と繊維学など各夫々特徴ある講義ぶりで張切ったものである。殊に当時日本の大学高専では，新進の学問であった遺伝学を講じた学校は一つもなく，本校でも所定の学科目ではなかったが，蚕種学の一部として篤学の田中長三郎先生が，ヨハンセン，ドフリース，ベーツソン，コルレンス等の原書から直接に明解な調子で講義せられ，私は今でもそのノートを保存している位である。そのわけは私が卒業する時，病理の新田助手に貸しておいたそのノートを，殆んど原稿なしで講義された田中先生が，後に丸山舎の依頼で日本で最初の遺伝学教科書を書かれる時に多少の参考ともなったらしく，従て間違えていた箇所などは先生が親しく御訂正下った筆の跡も残っている由緒ある貴重なノートだから永久保存としているわけである。その後私が東大理学部の植物学科に学んだ当時，藤井健次郎先生からも植物形態学の一部として遺伝学の講義を受けたことがあるが，これは上田在学中田中先生から習った内容の方が遙かに精しく，大変参考になったことを思出している。

当時の先生方は極めて若く，新楽，三吉，三谷先生は50才位で，針塚校長は正に40歳，阿形先生が34，5才，その他の先生は何れも20台という血気溌剌たるものであり，特に針塚先生が常にわれ等に訓辞せられた『身を挺して進んで難局に当れ』という所謂針塚精神をモットーとし，汗の体験による労働の神聖を鼓吹されたものである。

当時は校内には寄宿舎が無かったから東寮現在の上常田の滝沢氏宅）西寮（現在の下常田の寿食堂）南寮（踏入の細川氏宅か），北寮（現在の大門町）の外寮に分宿したが，在宿一年足らずで町内の下宿に移る者も多かった。

養蚕実習は毎年春，夏，秋蚕の3回宛，3学年共飼育し，第3学年の養蚕は所謂研究飼育であり，私は大森博士の下で膿病の病原体探究試験をやり，同期の篠原善次君と共に蚕種庫内の冷暗所において瑪瑙製の乳鉢と乳棒で膿汁中の多角体を12時間も磨砕した上，ライヒェルトの限外濾過装置で濾過した上，下液を別々に接種試験を行ったことなどは忘れられない。それから養蚕実習の試験を課せられたこともある。即ち一人宛呼ばれて蚕室内に入ると数人の助手が各関門毎に居られて，そこを通過する時に天候（晴），温度何度，湿度何%と黒板に書いてあり，例えば「第3齢5日目の蟻量一分の給桑をせよ」といわれる。暗記した標準表に従て硬軟桑混在

の桑葉中から3齢盛食期に適わしい熟度の桑葉を選んで適当の剉桑寸法と給桑量とを答い，庖丁を用いて適当に剉桑し，これを空白の蚕座上に給桑して見せることによって，一々採点されるということであった。中には飼育技術に長じていた向山隆福君（後の大阪高工教授理学博士）の如きはもう停食にしましたといって何もせずに出て来た者もあったが，この君は殆んど百点に近く，多くの生徒は落第点をとって了ったことがある。

又一年級の第一学期には職員生徒が全員で太郎山登山のレースを行ってたことがあるが，頂上では先生対生徒で相撲をとったが，阿形先生（当時34才）が数人の生徒を倒して優勝し，又勝木先生は柔道の手をつかって問題をかもしたことなどを覚えている。

当時の上田市内にはようやく電燈が一戸に一灯位宛附き始めた頃で，水道や瓦斯などはなく，従って田舎に下宿する者は学校のかえりにビール罎に石油を買って帰ったものである

当時の外国語は英語一点張りとなっていたが，われわれから第2外国語として養蚕科はドイツ語，製糸科はフランス語の教授を願い出で，朝の7時頃から一時間宛週2回，自由選択の講義として，ドイツ語は原田先生，フランス語は和田先生の担当で開講せられたが，初めは仲間が20人以上もあったが，次第に減って卒業当時は6，7人位になっていた。

勿論当時は封建時代でもあったせいか教室内の生徒の席は学業成績の順位で後から定められ，最後列の左右両端には選挙によって選ばれた正副総代が着席することになっていた。又第1学年の成績によって上位から一乃至三人が特待生に選ばれて，授業料が一ケ年間免除されていた。

私は大正3年上田を出てから大学や蚕糸試験場などで約9ケ年道草を食っていたが大正12年4月再び母校の教官として着任し，当時は第11回生が3年生，12回生が2年生，13回生が1年級という学生諸君に若い助教授として養蚕学と蚕体生理，解剖学を講じたが，それ以来35年の長年月，母校に教鞭をとり，去昭和33年3月定年制によって退官し，日今信大名誉教授の称号を授けられ，傍上田蚕種協同組合顧問として御手伝をして老後を送っている。大学時代に多勢の学生をして研究して頂いた未発表の論文が多数有るので，その取纒めなどに大童となり，幸いに健在で活動している次第である。

いまやわが母校も小泉博士を学部長に戴き，学科改新と，拡充の機運に際会し，恰かも開校当時のような張切った雰囲気に若返って，大発展を遂げられることを念願してやまないことに今回50周年記念事業として千曲会員同志の零細なる寄附によって出来上ろうとしている繊維科学振興会なる組織を通して，産業界と大学との緊密なる提携により，所謂産学協同の実をあげ，母校の先生方が象牙の塔を脱出して，母校はもとより，祖国の向上発展のために一層に尽瘁せられることを切望してやみません。

（昭和35年10月31日誌）

繊維学部に望みたい

石倉新十郎

創立50周年記念祝典に参列して半世紀前の記憶で構内をみると樹木の成長と入れ代りとに驚くと共に蚕室農場工場寄宿舎などが依然たるにも驚かされたり懐かしさを覚えたのであった。上田市の変貌著しいものを見たのに学部の容相は意外に旧態を留めていたにはいささか妙な感に打たれたのである。これは日本が民主制に革新されたのにまだ国民思想には旧式惰性がかなり残存するのに似たようなものであろうか。然し聞けば近く各科名が改変され内容も革新されるとのこと老骨にも歓喜を覚えさせられるのである。最近の卒業生の社会的進出は昔と全く異ったことは承知しているが，学部は如何なる理想のもとに将来の学生を教養されるか聞く時がなかった。そこで創立当初から老朽である筆者の望みが学部の参考とする価値あるかどうか問題であろうがここに記述してみたいのである。

新興人繊の物理的性質に関して従来表明された所は何れも天然繊維に比較して秀逸した点だけを唱導したものであろうそして多くは生産者側からの宣伝的説明であった。文献に遠い筆者は人工繊維天然繊維ともそれらの素質その利用法が人生と如何なる関係にあるかを科学的に解明された所を識らないのである。たとえば羊毛の形態的構造在りかたその素質が羊の生理的生存といかなる関係にあるかを科学的に解明された文献を知らない。同様に絹の素質繭の構成が蛹の生理的生存とどんな関係にあるかの問題も知らない。人類が麻本綿繊維を衣料その他に利用したことは太古からのことであり，科学の進歩を見た近世でも人生に対するこうした研究は等閑に附せられたのではなかろうか研究と発達を見たのは製糸法編織法刺繍法についてだけであろう。これらに関する科学的理論の幼稚さがそれを明かに示していよう。過去50年を反りみて日本では大学及び他の研究所の学者も繊維の実業者，政治家も同様に経済的に密接な方面だけに留意して，こうした方面には全々省りみようともしなかったのであろう。

今後わが日本の繊維産業を奨励振作するにも天然繊維人工繊維の経済的面だけでなく，これら繊維の本質と人生との関係を科学的に究明することは重大問題ではなかろうか。未だ人間の生存には空気の乾湿寒暑に対していかなる生理的関係が必要条件であるかを明かにした研究を知らない。それには人体の袍衣としての必要条件があろう。その関係から袍衣の構造材料の素質が定められようし，またなおこうした生理関係以外に人の社会的活動から袍衣の外観耐久力などの問題が加わるのではなかろうか。こうした諸問題が科学的に詳解されて初めて天然繊維人工繊維各々の特質の用途に対する適否程度が明かに認識されるであろう。学部の現存研究設備がこうした研究に適切であるかどうか，現職学者にこうした面への研究意慾があるかどうか知らないが，筆者はこれを望みたいのである。

青年学徒教養の方針としては繊維業開拓指導を以って海外に進出発展を志す意気旺盛な技能者を養成するに重点をおかれてはいかがであろうか。

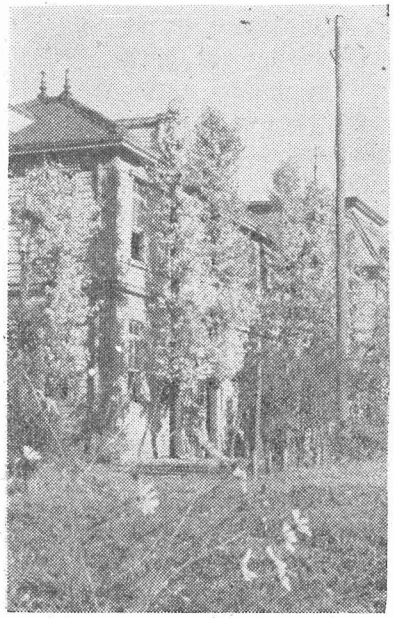
記念式参列雑記

みちのく生

――はじめに。
記念式にご出席の
なかった皆さんに
よんでいただきたい――

○

さんさんと降りそそぐ，秋の陽の静寂さの中で，将に終らんとする人生をおしむ老齢の卒業生と，近く出発をひかえた金ボタンの若人と，それ等の中間の人々とが，一つの大きな天幕の中で，目を一



つにし，耳一つになり切った，式典の一瞬は，全く感激そのものであったといってよかろう。式辞も祝辞も進行も，みんなみんなよかった。主催者側も参列者側も，創立半世紀を祝うに充分な感銘を受けることができた。

式典がすんで，祝宴の準備のできる間，外に出た。夜来の雨で，小さなプールのできた，何のかざり気も無いグランドには，何年振りかで会う者同志の，お互の笑声に満ち満ちていた。天幕の中から，ゆるやかなテンポで流れてくる曲は，何の曲かは知らないが，四囲の情勢によくマッチして，麗わしい気分を醸成した。それは何ともいいようのないよろこびであった。何年振りかで語り合う先生と弟子と，友と友との間に響いたあのピアノの音は実によかった。主催者側のこの企劃に対して，正に感謝を捧げたい。慾をいえば式典の中のどこかにも，何等かの音響があったらよかったと思う。之は恐らく筆者一人の感想ではなかったであろう。昇格後の今日では，今更旧い校歌でもあるまいが，式典にふさわしい何かの音楽がほしい気がした。

はるか25年前の今日を想起した。25周年の式典は，昇格前でもあり，軍国調華かな時代でもあったせいか，石倉新十郎先生の水ぎわ立った司会振りで，着剣勇ましく護られた校旗の入場とか，校歌の合唱とかいう場面が，沢山にくり展げられたことであった。つまりあの時は式典のアクセサリーが豊富であったわけだが今回の式典は式辞と祝辞とだけで戦後の世相を如実に表わし得て妙である。その時代時代にふさわしい進み方で，何れの場合も夫々にうれしい式典であったといってよい。

○

一週間続いた祭典のうち，筆者は2日間をでた。第1日の夕刻「たかね会――クラス会」を「うな藤」で閉じたあと，松尾町に出た。そのとたんに，乗用車・トラック等が，40台近くも並んで動かない光景にブツかった。よくみると停車している車の先頭に，菰かぶりのおみこしが悠々ともんで行く。遅々と進むので，交通は益々混雑してくるばかりで，列は何時動くのかもわからない。長野市から高崎市へ抜ける主要道路上のできごとである。交通巡査も居ないが，市民や運転手の罵声もない。みんなおとなしくおみこしの進行を待っている。このもの静かな光景に筆者は唖然とした。山都の人々の忍耐強さに感服して佇んで見守った。

おみこしには修已寮と書いたノボリがついていた。おみこしをかついだスポーツシャツとパンツの学生群は，まことに平和そのものであった。それはヒョロヒョロとしたノッポのインテリ型ではなく足の短いガッチリした学生の群であった

○

翌日ただ一人農場（筆者の時代は圃場と呼んでいた）に出てみた。農夫の公舎には，既に亡くなった山岸さんは居る筈もなかったし，気象観測露場には，その頃よく観測にでて来られた物理の原田先生の姿もなかった。烏帽子のトンガリはクッキリと晴れた秋空に，今にもつきささるように鋭かった。殿白のフクラミや弥津へ引く山裾のナイヴな曲線を，この圃場からあかず眺め続けた何十年前かを思い起した。四阿はプルシアンブリューの空に，ハメ絵のようにゆっくりと鎮もっていた。

蚕室の裏を通ってみた。3棟の蚕室は50年の星霜にすっかり傷つき，その痛みにあえいでいた。役割を果した戦士が，戦場の草むらに，静かな憩を続けているのに似ていた。青桐が佇々とそびえ，訪なう人もなく，静寂そのものであった。蚕室を継ぐ飛び石には，創設以来の体臭がしみつき，すっかりすり減っていた。かたわらの秋草の花は，感慨をこめて，長年の歴史を物語るかのようであった。

○

市内。

どんな細い小路も，すっかりコンクリートの舗装が完備していて，立派な街となっている。昔の面影は随所に残ってはいるが，変り方がかなり激しい。最も変り方の少ないのは，大宮(神社)さんの前から望見した鍋大への蚕影町であろう。神社の欅の大枝の下に，幕政時代からの街のたたずまいが開けていて，その屋並の上に西太郎（山）の急なスロープが，緑濃く色付いて懸っている。このヴィスタは空気の綺麗な山都ならでは得られない眺めだ。チューリッヒのどこかにでもありそうな絵だ。

2日目の午後，海野町のほていやデパートの4階に昇って，食堂の窓ガラスに鼻頭をこすり付けて，市の北郊を眺めた市の北半分が一望の下に見られる。山口の里が夕陽をまともに受けて，ヴィリイディアンに輝いて美しい。金剛寺の城山が大久保のスロープのかげになって，エローオカーに染まり東太郎の唐松のくすみが軟かい。修已寮にいた時，よく上草履のままで歩いた神科の丘が，沈黙を続けている。たもとにクルミの巨樹を持った，あの小学校の近くの土橋は，今もそのままに懸っているだろうか。

間もなく陽の落ちそうな気配に驚いてデパートをでた。自転車を借りて「やぶ」の下道を過ぎて，裏の湯の前を通り図書館にでた。どう道を間ちがえたのか公園にはナカナカでられなかったが，どうやら探しあてることができた。公園は相かわらず雑然としていた。薄暗くなって，ヤリは勿論コクサギ峠も夕もやに包まれてよくわからなかった。帰り，御廐裏を通ったら，秋の虫が鳴いていた。市街地のド真ん中に住んでいると，秋虫の声を聴くことがない。ココ御廐裏で今年はじめて聴くことができた。

○

上田駅を降りると，前の広場に大きな

岩がゴロッと転がっていて，その下に白いグラニットの玉石がゴロゴロ雑然とひきつめられているのに驚く。

はじめは何処かに庭作りがはじまってその運搬の途中の庭石かと思ったが，周囲に柵のあることから，これ自身が庭であることを知った。然し大岩が，浅間火山の岩かも知れないし，玉石が千曲川でもシンボライズしたものかも知れないと感じたのは，足が広場をでて松尾町の通りに入って後のことであった。いづれ名のある作庭者か，相当の画家の設計ででもあろうか。その岩には根が無かった。若しこの岩が，少し根を下ろして据つていたなら，また別な感じがでたであろうが，不安定にゴロッと丸坊主で転がって居り，その上，杉の丸太棒で支えがしてあるあたり，動的で危い感じである。不安定で今にも動きだしそうな大岩を見ることは恐ろしさが先に立った。

龍安寺の石庭を思わせるところがあるが，砂紋でなくて，大粒の玉石の積み重ねで，豪放なところが十二分にでていて立派である。然しデリカシーの面では少しもの足らない感じがした。でも大岩の上に，ほそい茎の秋草が，ナヨナヨと微風にそよいでいたのは，何ともうれしいことであった。

——終りに。

50周年記念は立派にすんだ。学部長さんはじめ150名の職員の皆さんのご苦労に対し，深甚の感謝の念を捧げたい。ほんとうにご苦労さまでした幹部の皆さまには，この式典を終ると同時に更に，続いて機構の改革について，より以上の働きを願うことと聞いて居りますが，どうぞよろしくお願いします。

幸いにしてこの式典に列し得たことを謝し，恩師同窓の健康を祝し，学部の発展を祈りたい。 （10月27日記）

仙台市中杉山通8 野口活也

母校50周年記念式に列席して

三村大八郎（糸32）

つるべ落しの秋の日（10月19日）は篠ノ井での乗り換の30分の間にとっぷりと暮れて暗くなった。軽井沢行の汽車では長野へ遠足に来た上田の子供等と一緒になり，上田の話など聞きながら退屈を感じなかった。上田城はライトに照されて夜空に美しく輝いている。

上田駅で母校案内係に予約しておいた旅館を聞く。別所へ定めておいて下さった由，これから別所へ行くに少し遅いし億劫でもある故相済まない事と思いながら電話で取消すことにして上田に泊る覚悟を決める。久振りに上田の夜を味わいたいと思ったのも別所へ行かなかった理由でもある。20年前の上田駅や駅前の面影は全く見る事が出来ない。学生時代の思い出は皆戦争に繋がるものばかりでありこの上田の駅も出征兵を送りに屢々来たものだし，又私自身も級友に送られて入営の為帰郷したものだった。ネオンの美しい松尾町を上って行ったら学生のパッパにぶつかった。なつかしいものである。50周年記念の前夜祭として今夜は街頭進出であろう。昔の運動会を思い出す別所へ行かなくてよかったと思ったりする。横町八木屋に至り一泊を乞う。受験の時一夜の宿をとり，又その後下宿のない時半月程厄介になったなつかしい宿である。あの頃の御主人がひょっこり顔を出しそうな気がするが，時代はもう変ってあらわれたのは御子息であった。話しているうちに同窓の塩入君であることがわかった。そう云われれば，昔の面影がある。入浴して夕食をすませたら9時近い。石井光一兄を訪ねてから寝に就く。

翌20日は快晴である。月並な表現であるがこの日を祝ぐかの様である。記念式は10時からであるが早朝に出て常入の昔の下宿へ行く。町の様子はどこにもすっかり変っているが大宮神社は全くそのままである。下宿の小母さんは年をとったが元気でむかえてくれる。しばらく思い出話に時を過して10時少し前に母校に至る。母校の入口を扼して我々学生に何かと関係の深かった玉屋旅館がとりかたづけられ学部の敷地になっておることが標識で気がついた。受付をすませて昔をしのびながらそこここと歩き廻る。学生時代のあれこれが走馬燈の様に脳裡をかすめるあの人この人昔の面影を止めた方々の顔に出会う。勿論声をかけても当時の一学生を思い出してくれそうにもない程の間柄である。病気をしたり，途中で入営したりして前後を通じて人の2倍近くの年月が上田に関係した私は上から下まで4クラスに席を置いた勘定になるので話し合う人も多からうと思うのに，而もこれから後の十数年とはちがいまだまだ卒業当時の容貌も忘れてしまう程には変っていると思われないのに同級生の顔に出合わない。母校に残った石川君は東京へ留学中で不在であるし，大先生は多忙の様子だから何れ祝宴の時にでもお目にかかる事として，一人運動場へ出て開式を待つ。修已寮も周囲は昔をしのぶべくもないが建物はそのままであり，太郎山や烏帽子の峯もそのままである。

定刻より大部遅れて午前11時少し前に記念式が始まった。会場は参列者多数の為運動場に特設された会場である。この日を迎える迄の母校並びに千曲会の方々の御労苦は大変なものであろうきわめておごそかに懐古の情を胸に秘めて無事終了した事は慶賀に堪えない。只ここで私の慾を言わせてもらうならば会場の席順を各科一緒でもよいから卒業年次順にしてほしかった。そうすればもっと多くの人に或は忘れて名のり会えない人とも言葉をかわせ得たかとも惜しまれる。殊に私の如く仕事が母校と縁遠くなってしまうと同窓諸兄に会う機会が極めて少いので残念の思い一入である。私は遂に昔を語る同級生には会わずに式を終った。今日こうして出て来たのも祝賀の意味が先づ第一ではあるが更に卒業以来別れたままの多くの友に会う事の出来る楽しみに胸ふくらせていたのであるが。我々より更に古い先輩の方々が級友同志で楽しそうに語り合うのを見ながら考えて見た。我々年輩の参会者が何故少いかと。戦争で多くの友を失った為だろうか，まだ前方を見つめて進む事の方が回顧する事より比重が高い年輩なんだろうか—昔をしのぶという感じの方が強いこうした記念式に参列する気持がないのだろうか。多忙すぎるのだろうか—はるばる上田まで出て来る余暇と自由とを持てないのだろうか，などとああこう思いめぐらした。

式後の祝宴会場ではじめて荒木，伊藤両君に会い祝盃をあげる事が出来た。20年に近い再会であるが一目でわかった夫々いいおやじになっているのを見て我を顧みたりした。いつまでも若いつもりである。会場では多くの恩師にお目にかかれたが時間の関係もあって遂にお目にかかれなかった先生もあったのは残念であった。

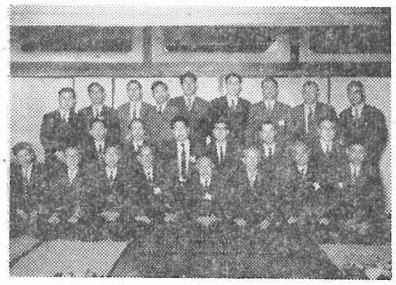
50年の星霜は実に長い。人皆夫々の感慨はあろうが，創立当時の方々は殊にそうであろう。蒲生先生の祝辞にそれがよ

く窺がわれる。50年後の100年記念式には参列の望は到底持てないが，母校の発展を祈って止まない。今日は誠にこよなきよき日に際会，参列出来た事をうれしく思う。

式場を出たら羽重，中沢両君に会う。荒木君等と同様この両君もやはり全く級友に会えないと残念がっていた。来あわせた柳沢先生と共に針塚先生の胸像を背にして記念撮影をして校門をでる。笹屋で一献傾ける事にして大宮神社の裏から近道をとる。なつかしい道である。海野町の方から学校へ通う近道であった。上田に過した者でなければこんな道は知らない。ここまで舗装が出来はじめている大滝先生が晩年を過された家もこの道に沿っている。笹屋も立派な店になった。たしか店を入って左の隅の方でよくおでんをつついたりしたものであるが，昔の面影今いづこという処である。ここでもやはり思い出話に花が咲く。級友のあれこれと話題に上る。そのうちに秋の日は傾きはじめたので，中沢君に別れをつげ再会を約して，羽重君と上田駅へ向って帰途についた。

昭和10年卒業生同級会を開く

去る10月20日母校創立50周年記念祝賀式にはるばる参集した機会に，夕方5時より上田市万花荘において恩師を迎え同級会を開いた。卒業以来の初顔も多く，時間の過ぎるのを忘れ遅くまで気焔をあげ散会した。



御出席戴いた先生の御氏名：一井上柳梧，佐藤利一，蒲生俊興，倉沢美徳，林貞三，山口定次郎，平尾孝平。

出席者氏名：一青木幹夫，伊藤幸男，大山　融，小林　敏，田近　肇，西沢正半田義雄，山岸政治，横山忠夫，藤田四郎，小松茂男，坂口育三，等々力宜安，猪原良芳，満沢　脩，山本七郎，大槻四郎（先輩），荒木　喬（先輩）。

（坂口記）

紡織科大会

待望の50周年記念祝典も多数の参加をみ，静粛に且盛大裡に滞りなく終了致しました事誠に同慶に存じます。終了後各科，年度別，最寄の懇親会だった様です中には卒業以来始めて顔を合せたと云う様な諸兄もあり極めて楽しい機会でありました。紡織科では午後6時から思い出の深い公園富貴に於て旧恩師石倉，目崎小林（清）3先生を囲んで紡織大会を催しました。

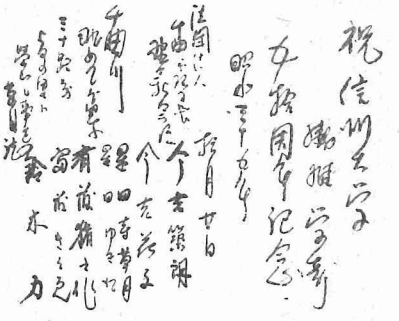
第一回生を始め約20余名参会され楽しい一夜を過しました。先生方は若人を凌

ぐ非常な元気で，我々弟子達は学生当時の気分にかえり，時のたつのも忘れ談笑の和気藹々の大会でした。中には御夫婦の御参加もあり一層大会に花を添え得ました。最後に石倉先生中心に記念撮影を致して無事散会致しました。

御多忙の為と思いますが若い諸兄の参加少なかったのは淋しい感でした。今後何かの機会に振って御参加下さる事を希望致します。　（小林）

星田馨氏一行の寄せ書

今吉筑朗氏，星田馨氏，斎藤猪之助氏鈴木力氏は記念式に参列のためみすずかる信濃路に御夫人同伴で御来会されました。上山田温泉，別所温泉に二泊その時御元気の寄せ書きを野口理事長に送られてきました。



柏友会員集まるの記

「人生50年化転のうちにくらぶれば夢まぼろしの如し」とうたった信長ではないが，昔ならとっくにこの世をおさらばの年令である吾々の仲間が今回の半世記を画する母校の祝賀式を機会に会合した一ケ月も前から連絡してようやくそれでも10名集った（うち奥さん同伴一人）大正14年春卒業し文字通り昭和年間を社会に出て暮して来た人々だ。思えば全く夢のようだ，当時は製糸業全盛時代で就職は引張りだこ，束になって就職した会社もあった，以来35年第一線を退いたものも出来，孫も出来て，ゆうゆう自適の生活をしている友もある。折角の会合だからうんとおごろうと第一級旅館へ交渉したが観光時期のため断わられようやく上山田温泉三楽荘へ和田龍の紹介で落着いた。参会するもの9名，当日の話から思い出すままに紹介しよう。

ＯＥ君戦後製糸協会から転じて日本シルクの常務となったが健康を害し引退して郷里に留り，今は自治会長おおせつかっているかたわら工場診断にとびまわっている。コンサルタント級の人。

ＷＳ君卒業以来事業をつぐ酒屋さん戦争中転業したのがたたって復活には血の出るような苦闘をやり，ようやく再開今は長男も大学を卒業して跡目をつぎ安心今回の祝賀式の酒をおさめ大好評を博した，目下バラ栽培に熱中している。

ＫＳ君東北地方業界の重鎮，卒業以来根が生えたように自分の工場を守り意気益々盛ん，不況斜陽産業の悪評の中にあってガッチリとした名指揮振りに会社は微動だもしない経営振りを示している。

ＴＥ君長じて益々元気，片倉にいる頃から人の意表をつくようなウイットの発言は年を重ねて益々円熟記憶力のよいことも有名，昨年阪大教授の令弟を近代科学のため失われ一寸と淋しそうだった。目下某会社の代表取締役となって大活躍をしている。自重自愛を祈る。

ＴＩ君郡是を早く止めて郷里名古屋で旅館をやっていたがこれも人にゆづり，目下奥さんと共にゆうゆう自適，今回も只一人の奥さん同伴での参会，まことに羨しい身分だ。

ＡＴ君宣伝をしないが級中第一の活動家，目下長野市にあって数会社の社長，重役兼業は十指に余るとか，当日も忙し

いと云って夜帰りした，とに角信頼の出来る友人だ困ったら何んでも引うけてもらうことにしよう，御自愛を祈る。

ＫＩ君級友只一人の高等学校の校長先生だ，運命はわからないもので彼は京都の繊維学部製糸科新設の時就職することになっていたのが一寸したタイミングの外れで駄目になった，実現していれば今頃はあちらで名教授として活躍していたことだ。

ＳＹ君は某県定所長を引退して目下千曲会事務局長をしている。50周年記念事業の事務を全部引受けて処理して呉れた今回の事業が円滑に済んだのも彼の明快なる事務処理のおかげと言って過言でない。

ＯＫかく言う小生は卒業後兵隊に行き一年会社生活をして学校へ舞いもどり辛さんをなめたが，さっぱり駄目，全くヘタなりにこびりついた乾柿のようになっていつしか30有余年を過ぎた，長年勤続と言うことで表彰されたがなんだかこそばゆい感じがしないでもない。

当夜はこんな昔話に花が咲いたが異口同音に出た言葉は長生きはしたいものだそのおかげでみんなに会えて楽しかった……と，

これを第１回の会合としてこれからも度々会おうと言うことになった，次回は諏訪でやることになった，それも費用は遠近含めてプール計算と云うことになった，級友各位これを読んだら次回からは是非参加して下さい，それも奥さん同伴と言うことで，では会えた人会えなかった人の御自愛を祈り次回を楽しみに筆をおくことにする。写真も写し寄せがきもしたが略す。

（糸12回卒ＯＫ生）35年11月10日記

新生会だより

戦後まもなく誕生した新生会（昭18．製糸科入学生）のつどいが母校創立50周年の記念祝賀を機会に10年ぶりでひらかれた。期待していた恩師林先生ならびに沖縄からはるばるジェット機で飛来する予定であった緑間武君（糸35）は都合でやむなく欠席され，集った会員は７名であった。しかし緑間君からの友情あふるる手紙と多大の御寄附ならびに佐藤平雄君（糸34）のスペシャルサービスによって思わぬ盛況裡に収獲もまた多大であった。当日は出席者一同感慨ぶかげに懐しの校門をくぐり記念祝賀に参加した。やがて開宴をされるや昔話に花を咲かせ，いまは亡き級友のこと，あるいは恩師窪田潤先生のことなど悲喜こもごもの会話がしきり，祝酒も適度にしみて，ウオーミングアップするや，会場を市内のバー・ロビンに移し，午前中の診察をすませてはせ参じた坂西博士（糸33前）らと合流，互いにうすくなりはじめた髪の毛を気にしながらもすっかり学生時代にかえり無邪気そのもの，飲む程に酔う程に本会場別所温泉〝たまや〟に到着したときはロレツもまわらぬ態であった。肝心の総会も鼻唄まじり，いつつきるともなくどうどうめぐり，そこへ沖縄からの祝電よくみると電文中に一句〝あの頃を思えば涙の感謝かな〟一同すっかり感激するやら恐縮するやら，酔いも一瞬にさめ議事たちどころに進行とはあいなった。早速黒岩君（糸33前）の発案で緑間君に対する寄書がかかれ，次回はオリンピックの年に東京で再会を約し，別れをおしみ

散会した。なお松山君（糸34）は御尊父の御逝去により，また花崎・吉沢両君は奥さまの御産・急病などで不参となったことは残念であった。

（写真左より黒岩・塩入・松永・青沼・坂西・佐藤・杉崎）

昭和四年組のクラス会

母校の50周年記念祝賀会は，信州特有の秋晴れの好天に恵まれ，式典にも来賓の出足がよく，式場にあてられたグランドの大天幕張りも，文字どおり立錐の余地がない程の盛況で，いかにも50才の齢を自然を含め総てが，あげて祝福してくれておるが如く感ぜられた。我々昭和四年組も，福島，東京，千葉，群馬等から馳せ参じて，藤井，小林（運）大沢，吉井，黒沢等の諸氏をはじめ14名（蚕５名糸７名，紡２名）を数えた。式典終了後直ちに位置こそ違い，昔なつかしい近藤料亭に集合した。

30年前み国のための校歌に送られ，感激の内に社会に巣立って以来，方面も異なり，ようとして音信のなかったものが，一目見てヤーで，万事オーケー，過ぐる年の奮斗無事を祝福し，感無量のカンパイ数度，中村，吉井とフケた順にテーブルスピーチを行い，一同全く昔の学生に

かえった気持で，当時の思い出に花を咲かせ，愉快な一刻を過して散会した。ここに不参の昭和４年組諸兄に御報告いだします。（小林尚一，中島運）35.11.21

本会日誌

○10月３日上田市連合自治会に50周年記念事業協賛会趣意書2.500部発送。
○10月４日記念事業祝賀行事総務委員会開催。
○10月６日記念式招待状追加250通発送
○10月14日会報編集委員会開催。
○10月20日待望の50周年記念祝賀式，午前10時より1.200余名の来賓を迎え校庭特設祝賀式場において盛大に挙行された。本会を代表して蒲生俊興氏祝詞を述べらる。式後本会主催の勤続者記念品贈呈を山口定次郎氏外９名に，又本会役員功労者林貞三氏外22名に表彰状記念品を贈呈。
○10月23日物故旧職員および会員の追悼会を旧本館講堂に開催。
○11月４日東京支会総会に本会より林顧問，坂口理事出席。
○11月15日東京支会唐木田藤五郎氏来会
○11月20日北九州支会長小山祖光氏来会
○11月21日50周年記念事業協賛会監事会開催。15時より上田市公会堂において協賛会総会開催。
○11月22日13時より本会定期監事会開催
○11月23日午前９時より理事会開催つづいて第21回定期総会を母校会議室において開催。
○11月28日改選選任された理事役員会を12月５日開催につき案内状発送す。

母校だより

10月6日(木)から4日間にわたり信州大学学生体育大会が母校で開催された。

10月8日（土）全国農水産学部長会議が母校会議室で開かれた。

10月19日（水）から一週間にわたり創立50周年祝賀会が盛大に催された。

第3回技術士国家試験合格者

昭和35年技術士国家試験に合格した名誉あるコンサルタントの称号を得られた会員は次の3名です。他にもこの国家試験に合格した方があると思いますが本会員多士済済続々現れるよう切望いたします。

岡亨四郎（紡11）繊維部門
荻原理宏（化6）繊維部門
由井千幸（糸16）農業部門
（昭和35年11月25日付官報告示）

林 貞三先生・八木 誠政先生 斎藤実先生退官記念資金募集

——締切は12月末日——

林・八木・斎藤先生の退官記念事業会は去る3月退官された各先生の母校ならびに学会・教育及び産業界に尽瘁された多大のご功績にたいして謝恩の微意を表すべく発足して以来各位の絶大なご支援をうけておりますことは誠にご同慶にたえません。

さて記念資金の申込締切期日も迫りましたので，下記申込要領をご参照の上一段とご協力をたまわりたくかさねてお願い申し上げます。

申込要領

イ）申込金額　1口｛個人 200円／法人 2000円｝

口数は自由，必ず先生別に明記のこと。

ロ）払込先

○振替口座　東京 43341
社団法人　千曲会内
林貞三先生記念事業会宛

○振替口座　長野 8275
八木誠政先生退官記念事業会宛

○振替口座　長野 6243
斎藤実先生退官記念の事業会

ハ）払込締切期日
昭和35年12月末日

50周年記念事業募金納入
(35.11.28現在)

① 東京支会
5,000円　加子三郎（蚕27）　藤田四郎（蚕22）
3,000円　雨宮金雄（蚕17）　岡 泰助（糸6）佐藤雅久（化3）
2,000円　奥野芳男（糸29）　滝沢昌一（蚕26）石坂茂（農3）松岡龍雄（化6）
1,000円　清水忠治（学紡6）　岡田晋一（農1）岩淵修（学化7）
500円　小林正平（化3）山本幸四郎（紡26）宮原 家候（化5）宮本 肅治（化5）須田 公三（化6）関口 利一（紡28）藤沢 和雄（紡28）寺島 貞三（化8）中沢秀（紡29）木次国利（農1）

② 埼玉支会
3,000円　塚本　優（蚕31）
1,000円　坂場もとえ（旧教）
350円　仁科和十（学糸8）　別府茂（学蚕4）金井弘（蚕別2）

③ 群馬支会
6,000円　杉山一雄（糸16）
2,000円　大館　幸（蚕19）岡部 伝一郎（糸35）中村折二郎（蚕17）
1,000円　丸茂まさえ（旧教）　大沢和夫（農4）斎藤繁太郎（蚕5）

④ 神奈川支会
3,000円　田中一男（糸1）
1,000円　湯原喜熙（学蚕3）

⑤ 越佐支会
5,000円　広井俊一（蚕5）
3,000円　山崎 伝（蚕17）

⑥ 北佐久支会
3,000円　小林孝平（化2）
2,000円　秋山昭夫（化6）
1,000円　西川美津子（学化6）
300円　小林節子（教養）　小市和代（〃）小村景子（〃）

⑦ 南佐久支会
1,000円　岩田静男（学蚕2）

⑧ 上小支会
5,000円　都筑賢吉（糸4）　高橋貞一（蚕蚕30）茅 野功（蚕19）臼田 隆夫（紡23）田口玲（紡19）遠藤利治（蚕31）
3,500円　上野義一（蚕29）
3,000円　清水　洸（蚕20）　牧島章吾（蚕21）
2,000円　丸山武夫（蚕5）小山 範雄（蚕36）龍野 重治（糸37）都筑 邦彦（化8）宮原 英俊（糸23）斎藤 好次（蚕37）中沢 隆男（糸32）中村 精一（農1）臼田武雄（紡22）
1,500円　松原俊一（農 ）上村 圭一（学蚕1）永田治雄（紡26）窪田衛二（学蚕4）池田正三（糸18）渡辺美直（蚕別1）
1,000円　清水一寛（学紡5）池田 かよ（養5）森田すい（旧教）田中福三（糸35）児玉正志（紡21）小林格（蚕37）西尾泰徳（学蚕6）河村恒雄（学蚕7）下原光男（学紡4）久保田貞雄（学蚕6）望月　浩（学蚕6）香山章（学蚕7）上原芳友（蚕別5）柳田方志（農2）渡辺寛次（農2）荒井三郎（学糸7）小林　久（旧教）武井伍一（学糸3）飯島光子（旧教）塩入貞雄（糸33）小林てる子（旧教）西川悌雄（学化6）清水　六（養2）佐藤正枝（養4）和田宗昭（学蚕8）高橋公一（糸29）塚田　充（学蚕8）
500円　金井　節（養9）　深町てる（〃）深井常子（糸別4）伊部ミサ子（養8）梅田 幸枝（旧教）西沢 安子（養8）
300円　宮原広子（教6）

⑨ 更埴支会
2,000円　宮本千秋（紡21）
1,000円　宮崎秋雄（蚕36）

⑩ 北信支会
10,000円　橋詰英雄（紡4）
3,000円　飯田一郎（化3）神林浩三（紡4）
2,000円　谷口勁一（化6）田中甲二（化6）
1,500円　斎藤　浩（農4）　塚田長治（農2）
1,000円　林 安一（学蚕3）臼田英雄（農8）一之瀬高房（農1）尾和信治（農5）奈須野　正（農2）湯本邦雄（学蚕7）清水茂一（農1）

⑪ 安筑支会
5,000円　水谷郷一（糸3）

⑫ 諏訪支会
8,000円　岡村源一（糸9）
3,000円　御子柴義之（糸13）
2,000円　岡　幸作（糸19）　松野文男（紡26）花岡作弥（蚕1）
1,500円　武井頼太郎（糸28）　宇都宮正（化5）
1,000円　宮坂　栄（糸18）武井 志郎（蚕33）今井康裕（糸別2）山岡弘武（蚕37）林　謹一（糸18）　小林益美（学糸5）

⑬ 龍川支会
3,000円　石塚浪之助（糸7）
1,500円　木下登美男（蚕別2）
1,000円　中島伸彦（蚕別4）　古沢昭二（学蚕6）
800円　久保田啓資（蚕別6）

⑭ 岐阜支会
3,000円　山部金三郎（蚕30）

⑮ 静岡支会
5,000円　石川健丸（糸6）

⑯ 愛知支会
5,000円　小中　潔（蚕10）
1,000円　名倉　登（蚕別6）

⑰ 近畿支会
5,000円　前田益蔵（糸10）　岡崎喜熊（紡5）
4,500円　松沢　栄（紡12）
2,500円　小林清茂（紡25）　伊倉和夫（化5）橘　好雄（紡26）
2,000円　松野喬木（紡27）　松井寛一（農1）島田 三郎（糸35）光間 克一（農2）北沢　亨（化7）富岡晃（化8）赤尾寅夫（紡29）
1,500円　坂口安弘（化9）　中沢悦治（化9）帯谷清之助（学紡1）宮田盛夫（化9）堅谷貞哉（蚕37）色川　暐（化9）

1,000円 山上洋介（学化5） 小野沢道生（学化1）小林梅雄（学紡5）松木文善（学化3）倉科和夫（学化5）林貞男（学化5）村田鈴子（学紡5）滝沢啓三（学紡5）小林博美（化3）矢ヶ崎千代子（学化5）唐沢郁夫（化2）新海恒久（学化3）
500円 古谷カナヱ（旧教）

⑱ 兵庫支会
4,000円 柳沢柳二（紡17）

⑲ 山陽支会
5,000円 近藤清一（紡11）
4,500円 藤井宗雄（蚕22）
3,500円 奥明聰夫（紡20）
3,000円 下田統夫（紡18） 平井克巳（化2）
2,500円 柄沢俊信（化2） 星島讃一（蚕専）
2,000円 鈴木 力（紡12）大森 武（農2）塩田秀三郎（糸31）
1,500円 松田 栄（蚕27）
1,000円 水野 保（学紡2）松田昭（学糸7）

⑳ 徳島支会
3,500円 石立輝久（紡18）

㉑ 愛媛支会
1,000円 須沢保夫（学糸2） 佐々木喜久（学紡7）北村彰伴（学紡7）

㉒ 北九州支会
5,000円 江頭辰雄（蚕5）
2,000円 宮崎圭司（北1）
1,000円 工藤一二三（蚕1）

㉓ 宮崎支会
2,000円 三宅 太（紡19）
1,000円 上野昌彦（学化2）

㉔ 鹿児島支会
2,000円 東 忠秀（化1）
1,000円 入佐一郎（蚕21）

㉕ 沖 縄
5,000円 宮城 薫（蚕19） 緑間 武（糸35）

小 計 379,050円
累 計 5,567,800円

年賀広告募集

例年のように新年号年賀広告を募集いたします。ふるってお申し込み下さい。

記

○締切：12 月 20 日
○料金：1 コマ ¥100
○申込：料金を下記あてお納付の上お申し込み下さい。

上田市 信州大学千曲会

会費を納めて下さい

本会活動が円滑活発に出来ますよう会費を納めて下さい。会費の納入についてはなるべく次の方法によってお納め下さい。

(1) 支会で会費を纏めて下されば交付金をさし上げます。交附額を差引いて本部へ御送金下さい。(2) 振替用紙御利用の方は長野6243又は東京4331で。(3) 昭和25年にさかのぼって未納金を納めて下さる方は分納でも結構です。尚昭和32年から会費が300円です。

会費と交附額一覧表

項目＼年度	昭和24年	〃25～28 各年	〃29～31 各年	32～33 各年	〃 34 年	〃 35 年
会 費	100円	200円	200円	300円	300円	300円
交付金	1/3	1/3	60円	100円	100円	100円

編集後記

このたびの母校創立50周年記念事業は連日晴天に恵まれて盛大裡にとどこおりなく終了致しました。これ偏にご多忙中多数出席下さった来賓および御協賛をいただいた関係各位の御援助と愛校の賜と深く感謝申し上げます。

今回は記念特別号として増頁致しました。50周年記念行事は記録として将来に残す意味でなるべく克明に報告することに努めました。御多忙中記念式参列の記を御執筆下さった清生俊興，石倉新十郎，野口活也，三村大八郎各氏および祝賀式参列後数多くの同級会が催された記事を御寄稿の各氏に御礼申し上げます。

顧りみますれば，国内をはじめ世界において数多くの話題を賑わせた事件があり，又創立50周年記念という母校の歴史に一大エポックを画する最も意義ある1960年の幕が間もなくきりおとされようとしています。残り少ない1960年を有意義に過ごされ，来る年も生甲斐のあるそして又より知性の飛躍に心して希望多き年として下さるとともに千曲会本誌のためにも尚一層のご協力あられんことを切に希望してやみません。

編集理事 田口 亮平 白井 美明
編集部員 矢彦沢清允 降旗 剛寛
篠原 昭 小笠原真次
滝沢 達夫 白井 要範

用水処理剤

繊維加工用水の処理……金属イオン封鎖剤 CHELATE-S
ボイラー用水の処理……高純度清缶剤 CHELATE-B
精練・漂白助剤…… CHELATOLE-60
食品添加剤…… CHELATE-F
○ 詳細説明書御申込次第お送り申し上げます。
千曲会々員 鈴木 薫

日東化工株式會社
東京都目黒区足洗1442番地 電話（781）9526

特 許・実用新案
意匠・商標 出願・審判・訴訟代理
浜 特 許 事 務 所
弁理士 浜 香 三
事務所 東京都港区芝南佐久間町1ノ51
電 話 東 京（501）9202
自 宅 東京都武蔵野市緑町公団住宅7ノ302